

令和7年度第2回北九州市子ども読書活動推進会議 会議録(要旨)

1 日時 令和7年8月8日(金)14:00～15:30

2 場所 北九州市立子ども図書館2階 大研修室

3 出席者

[委員](敬称略)

山元 悦子、河野 智文、上満 佳子、井上 弘之、中村 仁、重國 香、
本田 裕樹、川嶋 洋子、二田水 ゆかり、吉村 敦子、鶴田 弥生、
前田 彩乃

計12名

[事務局]

中央図書館 館長 他8名

4 議事

「北九州市子ども読書プラン(第5次北九州市子ども読書活動推進計画)」
の検討について

(1)第5次北九州市子ども読書プラン【概要版】について

(2)「北九州市子ども読書プラン(第5次北九州市子ども読書活動推進計
画)」素案について

(3)第5次 北九州市子ども読書プランの主要施策にぶら下がる新規・既存
事業一覧について

(事務局)本推進会議は、北九州市子ども読書活動推進条例に基づき、子ども
たちの読書活動を総合的に推進する上で極めて重要な役割を担ってい
る。これまでの会議においては、委員の皆様から、熱心かつ多角的なご
議論を賜り、その貴重なご意見は、本市における子どもたちの読書活動
の日々の実践に生かされている。

8月1日より委員改選となり、今回から新たに10名の委員の皆様をお
迎えした。本日の推進会議での意見を踏まえ次期プランを精査し、子ど
もたちが読書の楽しさに触れて、豊かな心を育むことができるよう、教
育委員会として、図書館として、より一層子どもの読書活動推進に取り
組んで参りたい。

(委員)今年5月に行われた会議で出された意見について確認する。学校
図書館司書の配置、学校図書館の常時開館について、子ども読書活動推

進条例に掲げる内容がまだ実施できていないのではないか、という意見が出た。そのことについて、事務局からご回答いただきたい。

(事務局)まず、学校における図書館の職員について、中学校62校及び特別支援学校1校を拠点勤務校として、全小中特別支援学校196校に配置された学校図書館職員が現在63名いる。司書教諭及び、図書館教育主任、またブックヘルパーなどと連携しながら、計画的な図書資料の収集、館内の整備などを行い、子どもたちが気兼ねなく図書館を利用し、読書を楽しむことができる環境を整えている。

次に常時開館に関連して、「学校における読書活動の推進」【主要施策】の③番に新規として記載した。「学校丸ごと図書館への推進」としている。「学校丸ごと図書館の推進」によって、子どもたちがいつでも本に親しめる環境を整え、従来の図書室に加え、各教室や廊下、空きスペースに読書コーナーを設け、休み時間や放課後に気軽に読書ができる場を提供する。また、本が身近にある環境を充実させるために、「授業お役立ちブックリスト」を現在作成している。

電子図書館を活用することにより、読書を日常生活の一部とし、すべての児童生徒に平等な読書機会を確保する。子どもたちの読書活動を、より身近で積極的なものにするよう取り組んでいる。

(委員)学校図書館司書の配置については、職員63名が196校に赴いている、ということだ。また、学校図書館の常時開館に関しては、図書館が図書館のエリアのみならず、様々なエリアを使って展開していくよう施策として打ち出しているので、常時開館に準ずると考えているという説明だった。条例を見直すことについては、いかがだろうか。

(委員)第1回会議のときに出されていた、学校図書館に係る指摘について、第5次のプランの中で、学校図書館体制強化、学校丸ごと図書館の推進を打ち出していただけっているので、条例自体の見直しは必要ないと思う。

(委員)特にご意見がないようなので、子ども読書活動の推進条例の見直しには踏み込まない。

【議事】「北九州市子ども読書プラン(第5次北九州市子ども読書活動推進計画)」の検討について

(事務局)議事の(1)～(3)について、資料1～4をもとに説明

(委員)プランや、それにぶら下がった新しい施策などの一覧について、質問ご意見を取りまぜて、頂戴しようと思う。

(委員)とても楽しい施策が多く、いい変化を期待したい。特に、「学校丸ごと図書館」も始まるということで楽しみだ。また、「授業お役立ちブックリスト」も、私も知りたいと思うくらい楽しみだ。もう1つ期待していることは、地域とのイベント協力ということで、具体的な話がたくさん出てくるいいと思う。

夏の期間、子ども図書館を訪れると、本の感想絵(画)があったり、子ども達がおすすめの本があったり、とてもわくわくする。インプットしたものをアウトプットするときに、感想文だけではなく、自分が得意な絵や、おすすめ文を書くことも、違う視点を持つことになるので、いい効果が現れるのではないかなと思う。例えば、この近所でも、JAM 広場や商店街で本のイベントがある。子どもたちの自筆のおすすめ文などを見ると、やはり足を止める。本に興味を持っていただけなのではと思い、よい取り組みだと感じた。

(委員)今のご意見はこの概要版のプランのどこにあたるだろうか。

(委員)地域の④のところではと思う。小倉駅の改札を出たら広場があって、そこで古本市や、本のイベントが行われている。持ち寄った本の話をしなから交換したり、販売したりもしている。

(委員)そのような企画との連携は今までにありましたか。

(事務局)していない。市立図書館、子ども図書館だけではなく、外に出て、地域の皆さんが足を運ぶ場所に、子どもの読書に関わる発表の場を積極的に作る必要があると感じた。地域の団体の方や他部局の力を借りて、環境づくりに尽力していきたいと思う。

(委員)地域の団体と繋がりを作ることと、先ほど子ども達のおすすめカードが非常に有効だというお話があった。子どもたちの発信の場としての図書館ということから、JAM 広場に本を持っていくことは難しいかもしれないが、おすすめカードを展示してもらうなど、子どもたちの発信

の場というアイデアとも絡めることができればいいと思う。

(委員)私も正直、大人になって本を読み始めた。子どものころ本に触れる機会がなかった。やはり、親が読まない子どもも読まないのだと実感している。

現在、八幡東区で読書会を開催している。課題図書を事前に読んで感想をシェアするのではなく、リアルタイムで持ち寄って、本を読んで、その場で感想をシェアしている。前回開催されたときは、1歳の子どもが親子で来られて、上は60歳ぐらいまでの参加があった。吃音がある子どもは感想シェアが難しいので、感じたままを言葉にしてもらった。インクルーシブな読書会を行っている。私も手書きの感想シェアを行っている。八幡東区のカフェ、コミュニティスペースをお借りして、月1で活動しているので、やすく、楽しむというところに親和性があるのではないかなと思う。

(委員)このような読書会が八幡東区でスタートしているとは知っていたか。

(事務局)知らなかった。とてもありがたい情報だ。子ども図書館、市立図書館だけの力では、子どもの読書習慣をつけていくことに限界がある。やはり地域の人材、地域の皆さんの力を借りなければならない。このような読書会が広がり、私たちも連携しながら広めていくことも、我々の仕事ではないかなと思う。

(委員)施策で言うところのどちらに含み込めるのか。

(事務局)地域における読書活動の推進の④、⑤ではないだろうか。地域コミュニティというのは、その地域の中で重要な柱になるものだ。地域にある市立図書館、読み聞かせ団体が発展していくことができればいいと思う。その音頭をとるのが教育委員会であると考えてる。

(委員)「学校における読書活動の推進」に関して、「学校丸ごと図書館の推進」がとてもいい施策だと思った。「10分間読書の推進」を明確に上げていただいたのがとてもうれしい。普段学校に読書ボランティアで行くと、毎日の10分間が必ずしも確保されていないという印象をもつ。朝10分間の積み重ねはとても大きいことで、その意義を学校現場の先生方も改めてわかっていただけたら嬉しい。

1つ不安に思うことは、学校の至るところに本を置くのは、司書の立場

になると、蔵書点検の時に学校を駆けずり回って本を確認しなければならないので、大変だなと思う。蔵書点検とは、その年度にある本の所在をすべて確認する作業なので、本が学校中に分散すると、確認する作業がとても大変になる。しかし、廃棄になった本を置こう、と安易になってはいけないと思う。子どもたちにとって魅力のある、読みたくなるような本を置き、「学校丸ごと」読みたくなる本がある場所になれば、素敵なことだと思った。

次に、はじめての絵本について、お渡しするパーセンテージがとても上がっていてとてもよいと思う。NPOブックスタートは、日本語以外を母語とする対象者に絵本をプレゼントする場合、日本語以外の本文のテキストが書かれてあるシールと一緒に入手できるのだが、そのようなことはされているのか。

(事務局) 貴重なご意見ありがとうございます。今はそのような配慮はできていない。

(委員) NPOブックスタートでは、読み聞かせるときの動画なども配信で見ることができる。日本語以外を母語とする赤ちゃんへの配慮がある。

(委員) 3つご指摘があった。1つ目、10分間読書の推進に関しては、子どもたちが持っている電子書籍のIDを活用し、タブレットの中の電子書籍を読むことがよいのではと個人的に思った。

2つ目、学校丸ごと図書館の、本の管理や、本の選び方について。

3つ目は、はじめての絵本に関して、日本語以外の子どもたちへの対応について。

(事務局) 1点目「10分間読書の推進」に関し、改めて読書の大切さを伝えていかなければならないということから、子ども読書プランに記載をさせていただく。

2点目の、「学校丸ごと図書館」で本の貸し出し等に関しては、あるテーマに沿った本を集めて廊下の1スペースに置いたり、学級文庫としてローテーションでまわしたりしながら、先生の目が届くところで管理していればよいと思う。なかなか本を読む機会がない子どもが、生活動線の中に本があることによって、「こんな本があるなら読んでみようかな」という気持ちになってほしい。カフェスペースのような、椅子を置いたり、テーブルを置いたりして、読書を促したい。図書館に行くきっかけになれば

いいと思う。図書館には、たくさんの本があることを紹介する前段として、本に親しむところから始めていこうという計画だ。

(委員)「学校丸ごと図書館」のイメージに対して、小学校の校長先生や、特別支援学校校長先生、何かありましたらご意見いただきたい。

(委員)スペースを見つけて本を置いている学校が増えてきていると感じている。第5次のプランの中に組み込まれることによって、さらに広がるのではないかと思う。

今、本校では、子どもたちがリクエストした本を寄贈していただいている。新しく立派な本で、廊下のいろんなスペースに置いていて、子どもたちがすごく利用している。やはり廃棄の本や、背表紙が薄くなってしまっている本は、なかなか子どもたちの手には届きにくいのではないだろうか。

(委員)特別支援学校にはいろんな特性のある子どもがいる。これを見たときに、すべてできるのかというと、クエスチョンがある。保護者がその気になって協力していただけないとできないので、まず保護者にいろいろなアナウンスをしていくことが大事だと思った。廊下において、職員の方からアプローチしていく形で本に触っていくとか、本の中の、例えば「絵」を映すことから始まって、本を読むというよりも、本をさわるところからのスタートになっていくのかなと、思った。学年が上がれば調べ学習も行うので、その時に関する本だけを図書館から借りてきて、その学年フロアに置く、ということは可能かなと思った。

(委員)学校図書館が1つの文化サロンのようなものになればいいと思う。挿絵のない本に挿絵をつけるなどの、文化的な営みが広がればいいと思う。それでは他になにかございますか。

(委員)コミュニティスクールのことについて。私自身、地域の自治会や、社会福祉協議会などでいろいろな活動を行っている。地域情報誌の内容を考えていた時、「子どもたちから大人に読んで欲しい1冊」というテーマで原稿を書いてもらおうと考えた。学校に依頼をして、本好きの子がいればという形をお願いをした。まだ結果は出ていないが、そのような取り組みを始めた。地域の中で、情報誌を出しているところがたくさんあるので、自治会の情報誌の方に声かけていただいて、そこから学校に繋

げてもらう、子どもたちに原稿書いてもらうとか、そのような繋ぎ方はできると思う。コミュニティスクールのことも知ってもらう、図書のこと、図書活動のことも知ってもらうという流れができると思う。

(委員)地域のエリアの⑤「コミュニティスクールと学校図書館の連携を支援する」について、事務局ではどのようなイメージを持たれていますか。

(事務局)このコミュニティは、今からとても広がると思う。様々な支援の仕方、学校との連携のあり方があることに改めて気が付いた。教育委員会として、国型コミュニティというものを全学校に入れている。学校運営を地域全体でやっていくということを、教育委員会として旗を振っている。

子どもの大切な読書についての視点を、コミュニティスクールの中に入れて欲しいということを、まずは働きかけようと思う。

(委員)連携事業19番目に、「コミュニティスクールと学校図書館との連携」が入っているというのがわかった。これからの領域だと思う。もし今、何かアイデアがあれば、お願いします。

(委員)八幡東区でカフェをしている。地域、地域活性化を目的とした事業で、いろんな人が集っている。2階がコミュニティスペースで、多くの方がここで集って、いろいろな活動をされている。ここは読書を通して、本を通じて、いろいろな人と関わりたいという目的で行っている。本に触れてもらう機会を作ったので、読書会という形で活動している。

(委員)コミュニティスクールとは違うコミュニティが生まれているということですね。今後、いろいろな関わり、繋がりを作っていければと思う。

第4次、乳幼児期に関する取り組みで、成果指標を改めたところに関して、第1案は、地域のおはなし会や読み聞かせ会という、広く地域のものへの参加が入っていたが、第2案では市立図書館に絞っている。つまり、地域のおはなし会は回数が把握しにくいからということでしょうか。

(事務局)地域のおはなし会は、市立図書館が管理をしているところは把握できるのだが、独自でやっているところは、把握することが難しい。成果指標として、正確な数字を把握したいので、子ども図書館や市立図書館が関与して把握している数値とさせていただこうと思う。

(委員)客観性を重視した数値ということですね。第2案でよろしいでしょうか。特に異論はないというのが皆さんのご意見のようです。

(事務局)今後、10月にパブリックコメントを行う。市民の意見を反映させ、第3回目の会議でお示しする。